

山岡捷利先生のこと

御子柴 道夫

タイトル（それも儀礼的な送辞の）だから敬称をつけたが、私には山岡さんを先生と呼んだ記憶はない。特に意図したわけではないが、私のなかでは山岡さんは「山岡さん」でしかない。今かえりみるに、たしかに昨今の意味での「先生」という敬称や職能からこれほど遠い先生はいなかったとも思われるが、だからといって断じて悪口を云っているわけでも、蔑んでいるわけでもない。むしろかなり尊敬しているのだ。彼のしたための文章に関してはいうまでもないが、その人格すらをも、苦笑まじりの愛しさをこめて尊敬している。

山岡さんと交際をはじめたのは、私が本学の助教授になった平成元年以降のことなので、彼の35年におよぶ奉職生活のうちでは、まだそのつきあいは20年たらずだし、夜な夜な紅燈の巷に酔歩を迷わせたときもあれば、週一度大学校舎の廊下でとおり一遍の挨拶をかわすだけのこともあり、その交わりは時どきで深くも浅くもなったが、山岡さんの、偽悪的な見せかけの背後にひそむ細やかな心遣い、かなり酷い暴言の裏の廉恥の情はつねに私の心に温かなものを残してくれた。その意味でいつだって心はかよいあっていたとの自負はもっている（どうぞ嗤笑でも冷罵でも）。

先に私は、山岡さんを、「先生」という敬称にはほど遠かったと評したが、それに「昨今の意味で」との条件をつけておいた。見方によっては、彼ほど「大学」の先生らしい先生はいなかった。私の見解では、現今の大学は、その懐の浅さ、視野の狭さ、余裕のなさ、実利追求の姿勢の点で「大学」とは呼びがたい。そこで講ずる者も学ぶ者もまた然りであろう。

敗戦後まもなく、内田百間は辰野隆、藤原咲平との座談の中で「しかし大学なんていうところも、つぶれなくてよかったです。本当にあれが残っていればいろいろとまたおかしいことがありますからね。(笑)」と云っているが、もはや百間の意味する「いろいろとまたおかしいこと」は今後の大学には期待しがたいのではなからうか。心胆を寒からしめる不気味なことは起こるかもしれぬが、「おかしいこと」はもう大学には縁がないだろう。

山岡さんは「おかしなことがまだ多少はあった」大学の、最後の先生だったかもしれない。換言すれば、出鱈目がまだ残っていた大学の出鱈目な先生だったということにでもなるか（私は褒めているのですよ）。

私も山岡さんとほぼ同世代だと自認しているが（彼と談じたこともあるような気もするが、どうも私の2、3年あとから世代が変質したように思われる）、私の方が上等で常識的なので（嗤わば嗤え）、幾度となく彼の暴言、偽悪主義を窘めたものだった（覚えています

(6)

か?)。ところが寄る年波に、お互いに怒ることも少なくなり、良くいえば、角がとれて丸くなり、悪くいえば周囲と摩擦をおこすのが面倒くさくなり、それとともに山岡さんの偽悪主義も薄まってきたようで、そうなるとう度は逆に、もっと悪人になれ、乱暴になれと窘めたくなってくる。

いずれにせよ、こんなご時勢、互いにせいぜい頑張って不良老人になりましょう。